NEXCO東日本がお届けする「鬼平江戸処」の魅力（その弐）

正確な「道具立て」や「絵図」が、人情味あるドラマを生む。

実際の江戸の町にいる「追体験」ができる工夫

「鬼平江戸処」の世界観をかたちづくるにあたり、「建造物」、「食器や装飾品などの小道具類」、「背景を含めた全体像」など、細部にわたる作り込みが必要とされます。神崎さんは、そのすべての製作過程で、「鬼平の闊歩する町」としての息吹が感じられるよう、再現に対し厳しい目を向けています。神崎さんに時代考証のご苦労などについてお伺いしました。

「小説『鬼平犯科帳』の描写は、登場する小物や建造物など、民俗学者の目から見てもかなり史実に忠実です。ただ、二次元の文学作品なので、三次元にするための『図面』に落とし込んでいくときにどうしても小説では描き切れない部分が生まれてしまう。製作者側としてはそこに工夫がいるわけですし、また時代考証をする立場としては、それを情緒的イメージに流されず、あくまでも論理的に事実を検証し、史実との関連を裏付けていかなければならないのです」。

「鬼平江戸処」で設定されている時代や場所は限定されています。時代は、鬼平が生きた時代とされる文化文政期（1745-1829）ころ、あるいはそれ以降。江戸のなかでも日本橋、本所深川、両国広小路などの場所を表現しています。

日本橋の大店は、豪華にして洒脱な伊勢商人の建屋を再現。瓦葺の二階建てが立ち並ぶ建屋は史実に倣い、火災から避難しやすいように一直線の軒揃えにしました。また、お客さまをお迎えする正面手前の「日本橋の擬宝珠（ぎぼし）柱」は、江戸時代に実際に使用されたとおりの寸法、形状、色合いを復元していきます。

「大店の店舗の特徴や、老舗食べ物屋さんの食器類、芝居小屋ののぼりの素材や風合いなど、施設のなかでは、実際の江戸の町、そして〝鬼平の世界〟が追体験できるように工夫がされています。江戸の人々が、旅の行く先々で楽しみを見つけたように、現代のパーキングエリアもいまや立派な楽しみのひとつなのかもしれません。その時に大事なのは、楽しみを壊さないような正確な『道具立て』とその世界観に忠実な『絵図』なのです」。

あくまでも時代考証が私の役目と語る神崎さんですが、「鬼平江戸処」の今後については、こんな熱いエールを送ってくださっています。

「江戸の昔から、旅の楽しみはまず食べることです。美食家でお酒好きの鬼平さんの町。高速道路ですからお酒はありませんが、ここにはおいしいものがたくさん用意されています。江戸の物売りはいるし、江戸の匂いや音もある。江戸返り気分のなかで少しゆっくりと話をしながらおいしいものを味わう。さらに加えるなら、『鬼平犯科帳』で池波先生が大事にされた〝人情〟を味わえるような、そんなドラマが生まれたらおもしろい。施設ももちろん大事だけど、最後はフェイス・トゥ・フェイス。いつまでもいたくなるような、そんな居心地のいい接客の空間になるとうれしいですね」。

平成25年12月、羽生パーキングエリア（上り線）が「江戸」をテーマに生まれ変わる。職人さんの力や有識者の智恵を借り、細部にまでこだわった町をつくりあげる。江戸の建物や工芸品、町の賑わい、食べ物。そして、人々のしぐさや人情。開発に携わるクリエイターたちが明かす、「鬼平江戸処」の魅力。第二回のゲストは、江戸の時代考証を担当した民俗学者の神崎宣武（かんざきのりたけ）さんです。

神崎宣武（かんざきのりたけ）

1944年岡山県生まれ。民俗学者。旅の文化研究所所長、文化審議会委員、東京農業大学客員教授、郷里の岡山県では宇佐八幡神社宮司。著者に『盛り場の民俗史』『江戸の旅文化』（岩波新書）、『観光民俗学への旅』（河出書房新社）、『しきたりの日本文化』『旬の日本文化』（角川ソフィア文庫）など、多数。

小説「鬼平犯科帳」に登場するお店

『鬼平犯科帳』にはいくつものお店が登場する。鬼平は、食通であった作者・池波正太郎氏の分身であると評され、作中にはおいしそうな料理の描写も多く、池波氏自身も「江戸の味・池波正太郎」と題された語り下ろしインタビューのなかで、「鬼平犯科帳に書く食べ物というのは、ぼく自身が食べているものを基本にして、それで時代考証的に間違いがないかどうか調べて、それを書いている」と述べている。（『池波正太郎・鬼平料理帳』佐藤隆介編・文春文庫）

文中に蕎麦屋や小料理屋、船宿などを登場させることは、人の出入りも多く、酒を飲んでいれば多少の長居をしても不自然ではないので、同心と密偵との連絡場所として恰好の場になる。本所二ツ目の軍鶏鍋屋「五鉄」（人形町の玉ひでがモデルとされている）、本所の茶店「笹や」（本所深川の人々の動向に明るいお熊ばあさんの店）、深川・石島町の船宿「鶴や」（密偵・小房の粂八が亭主を務める）などは、シリーズを通して重要な連絡場所になっている。

その他、「気のきいた板前がいてけっこうなものを食べさせてくれる」、と鬼平が贔屓（ひいき）にしていたのは、今戸橋たもとの船宿「嶋や」と下谷・車坂町代地にある「ただもう、太打ちの田舎蕎麦一すじ」と評された蕎麦屋「小玉屋」などがあげられる。贔屓にしたかは定かではないが、その他作中には約20店舗が登場する。

参考文献／『鬼平犯科帳の世界』池波正太郎編（文春文庫）、『「鬼平犯科帳」お愉しみ読本』文藝春秋編（文春文庫）、『「鬼平犯科帳」に恋して候』西尾忠久著（清流出版）